

ここまで進んだ！最先端のがん医療

主催/静岡新聞社・静岡放送 共催/県立静岡がんセンター、三島市、長泉町、裾野市、函南町、清水町、三島市民文化会館 特別協賛/スルガ銀行

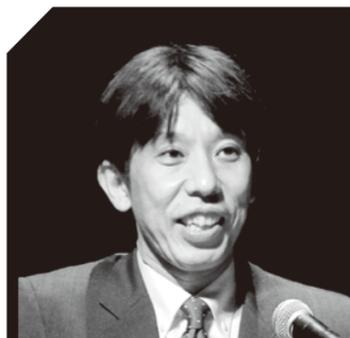
静岡がんセンター公開講座2023「ここまで進んだ！最先端のがん医療」(静岡新聞社・静岡放送主催、県立静岡がんセンター、三島市、長泉町、裾野市、函南町、清水町、三島市民文化会館共催、スルガ銀行特別協賛)の第1回(事前登録制)がこのほど、同会館で行われました。第1回は県立静岡がんセンターの上坂克彦総長が「あなたや家族ががんにかかったら」、同センターゲノム医療推進部ゲノム医療支援室長の鈮持広知氏が「遺伝子を調べてがんを治療する～がん遺伝子パネル検査と最先端の肺がん治療～」と題して講演し、ネット配信も行いました。その概要をまとめました。

〈企画・制作/静岡新聞社地域ビジネス推進局〉

遺伝子を調べてがんを治療する ～がん遺伝子パネル検査と最先端の肺がん治療～

皆さんの体の細胞の核の中にはゲノムがあります。ゲノムとはDNAの文字列に表された遺伝情報の全てを指します。ゲノムの中でも、たんぱく質の設計図の部分で遺伝子と呼びます。私たち人間のゲノムのDNAの文字列(塩基)は、32億文字列(塩基対)にもなります。実はこのゲノムを調べることで、がんの性質が分かるようになりました。がんは、異常な遺伝子の細胞が増えていく病気です。そこで今、遺伝子の検査結果に沿った薬剤を使った治療、すなわちがんのゲノム医療が進められています。現在行われているのが、2019年から保険診療で行える「がん遺伝子プロファイリング検査」で

遺伝子の検査結果で薬剤選択



県立静岡がんセンターゲノム医療推進部ゲノム医療支援室長 けんもつ ひろつぐ 鈮持 広知 氏

1999年横浜市立大医学部卒。県立総合病院、国立がんセンター東病院などを経て、2010年より静岡がんセンター呼吸器内科、18年よりゲノム医療支援室兼任。日本肺癌(がん)学会、日本呼吸器学会、日本臨床腫瘍学会協議員など。専門は肺がんの薬物治療。

あり、画期的な機器である「次世代シーケンサー」を用いて100〜500もの発がんに関連するとされる遺伝子を、一度に測定することができます。ただし、がんの患者さん誰もがこの検査を受けられるわけではありません。対象は二つの条件を満たす方です。まず、標準治療がない固形がんの患者さんや、局所進行、転移が認められ、標準治療が終了となった固形がん患者さん。もう一つは、全身状態および臓器機能などから、がん遺伝子パネル検査を施行後に、抗がん剤治療を受けられる可能性が高いと判断された患者さんです。つまり、決まった治療がない患者さん、もしくは決まった治療がもう既に終わったような患者さんが対象ということになります。

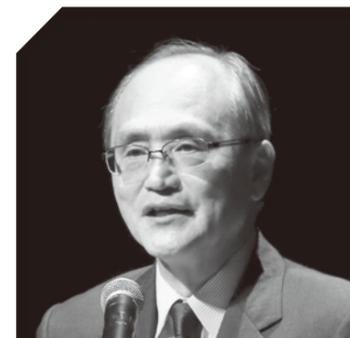
さらに、検査を受けた患者さんの中でも、4〜10%の方しか治療につながりません。また、検査可能な病院は「がんゲノム医療中核拠点病院」(当院を含む全国13カ所)、「がんゲノム医療拠点病院」(本県にはありません)、「がんゲノム医療連携病院」(本県に8カ所に限られます。がん遺伝子パネル検査で遺伝子が原因と判断され、適切な薬剤が見つかれば、飲み薬だけで非常に高い効果が期待できます。肺がん治療でも奏効

例えば、非小細胞肺がんの場合、複数のドライバー遺伝子(がん発生・進行に直接的な役割をする遺伝子)の変異と転座が報告されています。そこで治療前に八つの遺伝子検査が推奨されています。ここで、遺伝子変異か転座の陽性が確定すれば、分子標的治療薬が投与され、病巣の縮小が期待されます。現に、治療を受けた患者さんのおよそ60〜70%では、病巣の大きさが半分以下に縮小します。さらに、この非小細胞肺がんに関しては治療法が年々細分化されてきています。肺腺がんでは検査を行うことで、約70%の患者さんに治

最後に、当院の取り組みも紹介します。当院では「プロジェクトHOPPE(ホープ)」という研究を行い、日本人のがんゲノム情報の蓄積に貢献しています。2021年から全ゲノム解析の研究も始まりました。今はまだ、遺伝子検査を受けても、多くの患者さんに有効な治療法をお伝えすることができません。ですが、遺伝子パネル検査を受けることで、より効果が高い治療法や薬を、患者さんにお伝えできる時代が来るという、明るい展望を抱いています。がんゲノム医療は始まったばかりで、まだ過渡期ではありますが、当院では最大限の努力をして、一人でも多くの患者さんにゲノム医療を提供できるように、今後も努力していくことを約束します。

あなたや家族ががんにかかったら

がんは細胞の病気 積極的に検診を



県立静岡がんセンター 総長 うえさか かつひこ 上坂 克彦 氏

1982年名古屋大医学部卒。2002年静岡がんセンター肝胆膵外科部長、11年同副院長、20年同病院長、23年から現職。日本外科学会代議員・指導医、日本消化器外科学会評議員・指導医、日本肝胆膵外科学会評議員・高度技能指導医などを歴任。

わが国では、男性の66%、女性の51%が生後でがんに罹患(りかん)するといわれ、2人に1人はがんにかかる時代です。がんは、正常な細胞が突然がん化してできるものではありません。通常はごくつかの遺伝子の変異が段階的に作用して、時間をかけてがん化します。さらに1個のがん細胞が1〜大に増殖するのに、数年はかかります。大半のがんは遺伝子変異が原因で、がん全体の

ゲノム医療で 個別的な薬物療法

がんは、正常な細胞が突然がん化してできるものではありません。通常はごくつかの遺伝子の変異が段階的に作用して、時間をかけてがん化します。さらに1個のがん細胞が1〜大に増殖するのに、数年はかかります。大半のがんは遺伝子変異が原因で、がん全体の

がんは、正常な細胞が突然がん化してできるものではありません。通常はごくつかの遺伝子の変異が段階的に作用して、時間をかけてがん化します。さらに1個のがん細胞が1〜大に増殖するのに、数年はかかります。大半のがんは遺伝子変異が原因で、がん全体の

また、手術にも新たな術式が採用されています。当院では2008年頃から低侵襲の腹腔鏡手術、2011年からロボット支援下手術に先進的に取り組んできました。大腸がんのロボット支援下手術では、国内最多の2000件に達するところです。これら薬物療法や手術などの進歩のおかげで、わが国におけるがんの5年相対生存率は年々向上しています。今で

は、がんになっても約60%の方は治る時代になったといえるほどです。次に「もし、皆さんや家族ががんと診断されたら」という前提で、上手にがんに向き合う心得を五つお伝えします。まず「一人で悩みを抱えない」。家族や親しい友人、病院のスタッフに気持ちを伝えましょう。話すだけでも心が軽くなります。実は私も7年ほど前、あるがんに罹患しました。仕事をしながら抗がん剤治療を行い、今はすっかり元気ですが、がんと言われた時の不安感によく分かっています。がん診療連携拠点病院にはがん相談支援センターがあり、医療ソーシャルワーカーや看護師が相談に当たりますので、ぜひご活用ください。当院では「よろず相談」ががん相談支援センターにあり、当院を受診していない方の相談にも応じています。次に「落ち着いて情報を集める」。担当医の説明をよく聞き、正確な病名、がんの広がりや性質、治療法などを把握します。メモや録音しておくことも良い方法です。

3番目は「正しい情報を集める」。担当医の説明への疑問や、他に治療法がないか、セカンドオピニオンとして他の専門家に意見を求めることができます。当院でも年間1000件弱のセカンドオピニオンを受けています。また、今はインターネットやSNS(交流サイト)などで、科学的に誤った情報も散見されますので注意が必要です。4番目は「自分では決められない時」。治療法に選択肢があつて判断に迷う時は、医療スタッフや相談支援センターに気軽に相談しましょう。最後に、われわれは多職種チームでがん患者さんとご家族を支援します。多くの専門職が患者さんのケアに当たっていますので、困ったり悩んだりしたら気軽に相談ください。

「心得五つ がんとの向き合い方」

【事前登録申し込み方法】 問い合わせ：TEL 055(962)0381

①郵便番号・住所②氏名③年齢④性別⑤職業(学校名)⑥連絡先⑦メールアドレス⑧オンライン参加または会場参加を明記し、下記の静岡新聞社・静岡放送 東部総局にお申し込みください。受講料無料、1回だけの受講も可能です。

<はがき> 〒410-8560 (住所不要) 静岡新聞社・静岡放送 東部総局「静岡がんセンター公開講座」係

<FAX> 055-951-1400 ※件名に「静岡がんセンター公開講座」と記してください。

<応募フォーム> 右記2次元コードから応募フォームに入力

次回の講座は11月11日(土)の予定です。